

」 「朗読者の夢」

平成 28 年 12 月

「本を読むだけかと思っていたら、全然違った。主人公の姿かたちまで浮かんできて、まるで映画を見ているようだった。」

これは、初めて朗読を聴いた中学生の感想です。

放送ではなくホールやホテルなどでライブの朗読を始めたころ、若い人たちにも朗読に関心を持ってもらい、その中から朗読を目指す人が生まれてくれたらと「中学生や高校生に朗読を聴いてもらいたい」と会う人毎に話をしていました。そんなある日、学校に教材を納入している会社の経営者から、仙台市内の中学校を紹介され、全校生徒 800 人と先生、希望する父母に朗読するというチャンスに恵まれました。

ところが、どんな作品を朗読すれば中学生が喜び、朗読って素晴らしいと思ってもらえるかと悩みました。考えあぐねて、朗読を聴いてくれることになっている中学校の国語の先生に相談すると、教科書に載っているいくつかの文学作品を教えてくださいました。しかし、それらを読んでみても中学生に感動を与えるとは思えず、その後も何か良い作品はないものかと探し求める日々が続きました。

そんな時、新幹線の中で読もうと買った本が、私の心を捉えました。それは、オグ・マンディーノ作、坂本貢訳の「十二番目の天使」でした。交通事故で一瞬にして妻子を亡くし、生きる気力を失った男性が、嘗てリトルリーグと一緒にプレーした親友に頼まれて、仕方なく自分の在籍していたチームの監督を引き受けます。そこで出会った野球が下手で、でも諦めない一人の少年を、何とかみんなについて行けるようにと指導するうち、自らが生きる気力を取り戻していく物語です。感動的で、主人公が 11 歳と中学生に近い年代なので、朗読する作品はこれだと思った私は、カットを始めました。

単行本一冊全部読めば数時間かかるものを、何度もカットを重ね 1 時間 20 分になりました。まだ少し長いかなとは思いましたが、もうこれ以上切ると物語が壊れてよく分からなくなってしまいます。中学校に電話して恐る恐る「いい作品が見つかったのですが、1 時間 20 分かかります。如何でしょうか」と訊ねると「そんなに長い時間とても子どもたちは集中できません。授業時間が 45 分ですから長くてもそれくらい、できれば途中で休憩を入れて」とけんもほろろという感じでした。でも私は、どう考えても、これほど子供たちを感動させられる作品をこれから選べる自信がなく「なんとかこれでやらせてください。駄目だったら平謝りしますから」とそのまま朗読させてもらうことにしました。

当日、朗読を始めると最初の 3 分くらいは私語もあったのですが、読み進むうち会場は水を打ったようにシーンとしてきて、そのまま 1 時間 20 分生徒たちは集中して聴いてくれ終了したのです。最初に書いた感想は、その時朗読を初めて聞いてくれた女子生徒が書いたものです。

余談ですが、この朗読会がきっかけとなり、仙台市内の中学校、高等学校へその後何度も朗読に出向くことになりました。

私は、NHKのアナウンサー時代、大河ドラマ「おんな太閤記」の語りや、「NHKスペシャル」のナレーション、「ラジオ文芸館」の朗読などを続けてきました。その延長で退職後もライフワークとして、さまざまなかたちで朗読を続けています。東京・明大前の「キッド・アイラック・アート・ホール」では仲間と「読夢の会」を創って朗読会を続け、この朗読会には埼玉滋賀県人会の方々にも何度もお出でいただいています。ありがたいことです。

その他、各地のホールやホテル、学校などで朗読会を重ねていますが、数年前、海外協力基金ソウル事務所の依頼で、NHKアナウンサーの後輩・青木裕子と一緒に韓国に朗読に行ったことがあります。韓国の若い人たちの中には、日本企業に就職することや通訳者、翻訳家を目指して日本語を勉強する人がいて、その人たちに音の日本語を聞いていただくために朗読に行ったのです。もちろん日本語の朗読を聴くのはほとんどの人が初めてでしたが、一人の女性が「まるで映画を見ているようだった」と仙台の女子中学生と同じ事を言ったのです。これには驚きました。

でもこのことは、朗読を聴く人が音声によって、物語の情景を思い浮かべながら受け取っていくことを示しています。そのため朗読者は、聴く人が物語の情景を描きやすいように語っていくことが大事になります。書かれた文字を読むのではなく、作家が一文一文で何を言っているかをしっかり掴み、それを朗読者が自分の言葉で話すのです。ところが作家は話しやすいように文章を書いてくれないので、すべての文章を朗読者が自分の言葉として話せるようになるには時間と努力が必要になります。でも、その努力をした結果「まるで映画を見ているようだ」と言ってもらえると努力が報われたという思いになります。

「読夢の会」を創ってこれまでわれわれの朗読の拠点だった東京・明大前の「キッド・アイラック・アート・ホール」が、オーナーの窪島誠一郎氏の都合で今年中に閉鎖になります。われわれにとっては寂しいことなのですが、女子中学生や韓国の女性が言ってくれた「映画を見るような朗読」、朗読者が消えて物語の映像だけが聴く人の中に残る朗読を、残りの人生の中でも続けたいと私は思っています。

山 田 誠 浩 （川崎市在住 大津市出身）